
理の妖刀

ミッシ・ゴッシュ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理の妖刀

【Nコード】

N5285F

【作者名】

ミッシ・ゴッシュ

【あらすじ】

刀鍛冶と、刀を依頼した浪人の話。

爽やかな風が吹き抜ける草原の中に、ぽつんと小さな堀つ立て小屋がありました。小屋の横にはとても大きな樹がありますが、それ以外には何も在りません。

今にも倒壊しそうなぼろぼろの小屋には、老齡の男が住んでいました。

如何にも頑固そうな顔付きで、髪は短く刈つています。白髪が目立ち、その上頬には無精髭が軒を連ねています。

ある日、浪人風の男が老人のもとを訪ねて来ました。

「おやっさん、頼んでいたもんは出来たかい？」

壮年程の男が言いました。

「僕は約束と時間には敵しい男じゃ、ちゃんと出来とるわい」

おやっさんと呼ばれた老人は、少し不機嫌そうです。

「其処に座つて待つておれ」

男は老人に促され、小屋の中へと入りました。

「おやっさん、茶くらい出してくれねえのかい？」

「飲みたいなら勝手にしな」

老人のぶつきらぼうな声が、奥の部屋から返つて来ました。男は言われた通り、自分でお茶を用意しました。ちゃんと老人の分もです。

「ほれ」

部屋の奥から戻つて来た老人は、手に持っていた細長い包みを乱

暴に投げて寄越しました。

男が包みを開くと、中には漆黒の鞘に納まった刀が一振り。それを鞘から引き抜くと、男は感嘆の声を洩らしました。

「流石だなおやっさん。この間のよりもずっと立派じゃないか」
「当たり前じゃ、儂が丹精込めて鍛えたんじゃからな」

男は嬉しそうに刀身を指で擦ります。曇一つないそれは、まるで鏡のように男の顔を映します。老人は鼻を鳴らし、お茶を一口啜りました。

「粗末にするでないぞ、儂が鍛えた最後の刀なんじゃからな」
「どういう事だい？」

老人の言葉の深意を計り兼ねた男は、怪訝な表情を浮かべます。

「儂はもう……刀は打たん」
「そりやまた突然どうしたんだい」
「儂も歳じゃやて、節々がいとつてかなわん。明日からは畑でも耕してのんびり暮らさせてもらうわい。お主のお陰で、蓄えはようけあるしの」

老人が珍しく破顔しました。男はその言葉に憂い顔を見せます。
「って事は何だい、こいつを折つちまったら、俺はおやっさんの刀を振るえないって事かい？」

「そうなっちまうな……だが、これだけは憶えとくんじゃぞ」

老人はそう言うと、目を瞑りお茶を含みました。男は黙したまま、次の言葉を待ちます。

「名刀と妖刀は紙一重、要は使い手次第で如何様にも変じる。忘れてくれるな、どれほど優れた良い刀であろうと、使い手が理を欠け

ば妖刀へとなり下がる。逆もまた然りじゃ。お主はその辺を弁えておると、僕はそう信じとる」

「おやつさん……、俺は根っからの人斬りだ。相手がどんな人間だろうと依頼されれば殺すし、気紛れで斬る事もある」

男の表情に陰りが見えます。

「違う、お主は」

老人の首が床に転がりました。老人が最後に鍛えた刀で、男が首を刎ねたのです。

嘗て親のように慕った老人を殺し、男は泣く事も笑う事もなく言いました。

「いや、只の人斬りだよ……」

2008 / 09 / 17

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5285f/>

理の妖刀

2011年1月27日02時36分発行